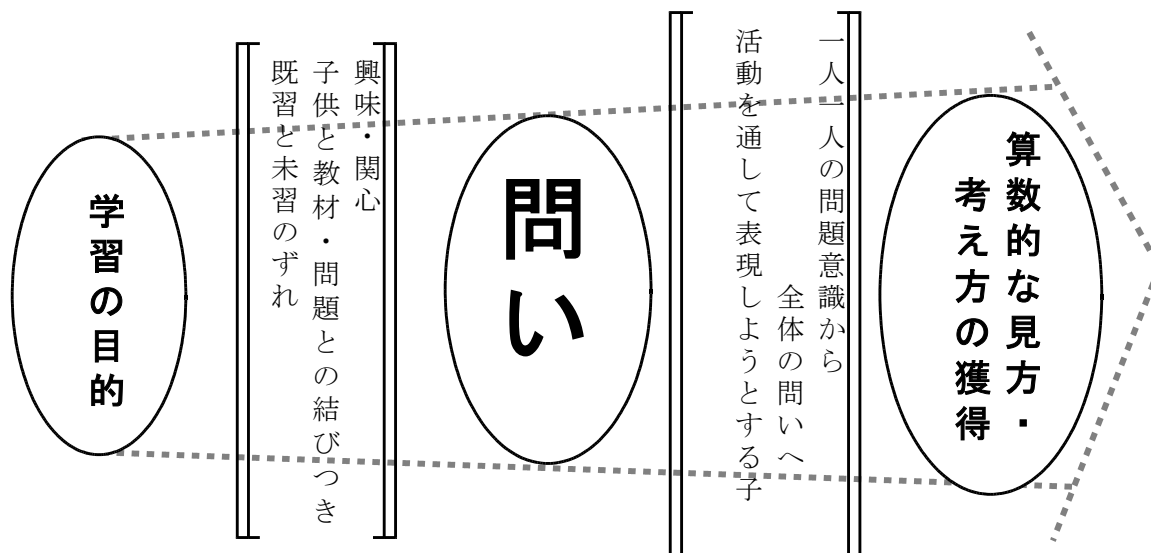


2. 目的を持って学習に取り組む子供

算数的な見方・考え方が広がる問題解決学習



学習の目的

一年生は一年生の、六年生は六年生の、算数学習に対する思いや願いがあります。学年、発達に応じた算数学習全体への見通しも、子供たちなりにもっています。私たちは授業実践を通して、学年ごとの子供たちの実態を考え、四領域にまたがる指導内容から狙いや価値を磨き上げた上で教材を開発し、大きな枠で算数教育を考えてきました。

- 子供は、どのような教材との出会いにより、どのような思いをもつか
- またどのような教師のかかわりにより、どのような既習の想起をするのか
- 学習展開や友達同士のかかわり合から、どんな問いへ高めていくか
- 問いの質を、どのようにとらえていくべきか

結果として、以上の点を算数学習を考える上での視点としてもつに至りました。

また、「問い」や「算数的活動」「学習を通して子供たちが培う力、獲得する価値」などがそれぞれ密接に関連・連続していることも明らかになってきています。子供たちは学習のスタート時から「問い」をもっているわけではありません。「問い」を高めていく過程も重視されなければなりません。ですから、子供たちが質の高い問いを生み出すためにも、学習を通して意欲的に学び続けるためにも、単元を通して素朴な「こんなことを考えたい、明らかにしたい」という思い、つまり「学習の目的」を重視しようとするのです。

「問い」を生み、深めていく

単元や小単元、“学習を始める”という時に子供が「やってみたい」とか「おもしろそう」または「前の学習を生かせばできそう」等と感じることは、とても大切です。その思いが「学習の目的」となり子供が動き始めなければ、学習そのものもなかなか成立しないものです。

- 考えや既習との「違い」が見えた時
- 一見違う場面で既習との「共通点」が見えた時
- 予想がつかない中で、価値の一部が見えた時

といった場合は、いずれも子供が目的を持って学び進める中で問いが生まれる過程です。学習の次の段階へ進んでいくと考えます。